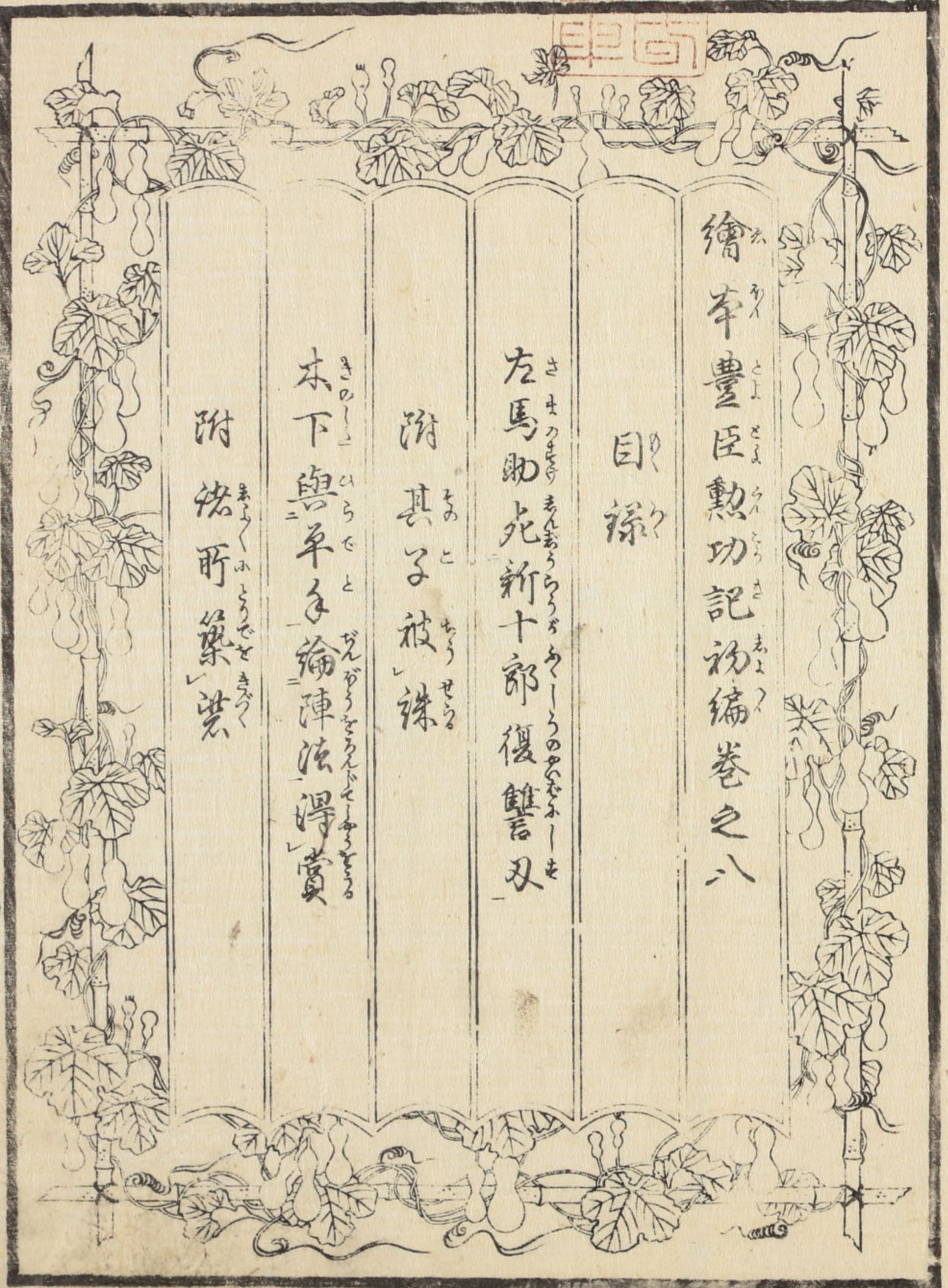


繪本豐臣勲功記

初編
八

4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8



繪本豊臣勲功記初編卷之八

目録

左馬助丸新十郎復讐さまたけまご まんあうらうが あくしうのあむふし又

附 其子被誅そのこ あうせう

木下與平子論陣法得賞きのしたひらでと だんがうせうんがとく

附 其所築あそぶところをまつく

豊臣記初編卷之八

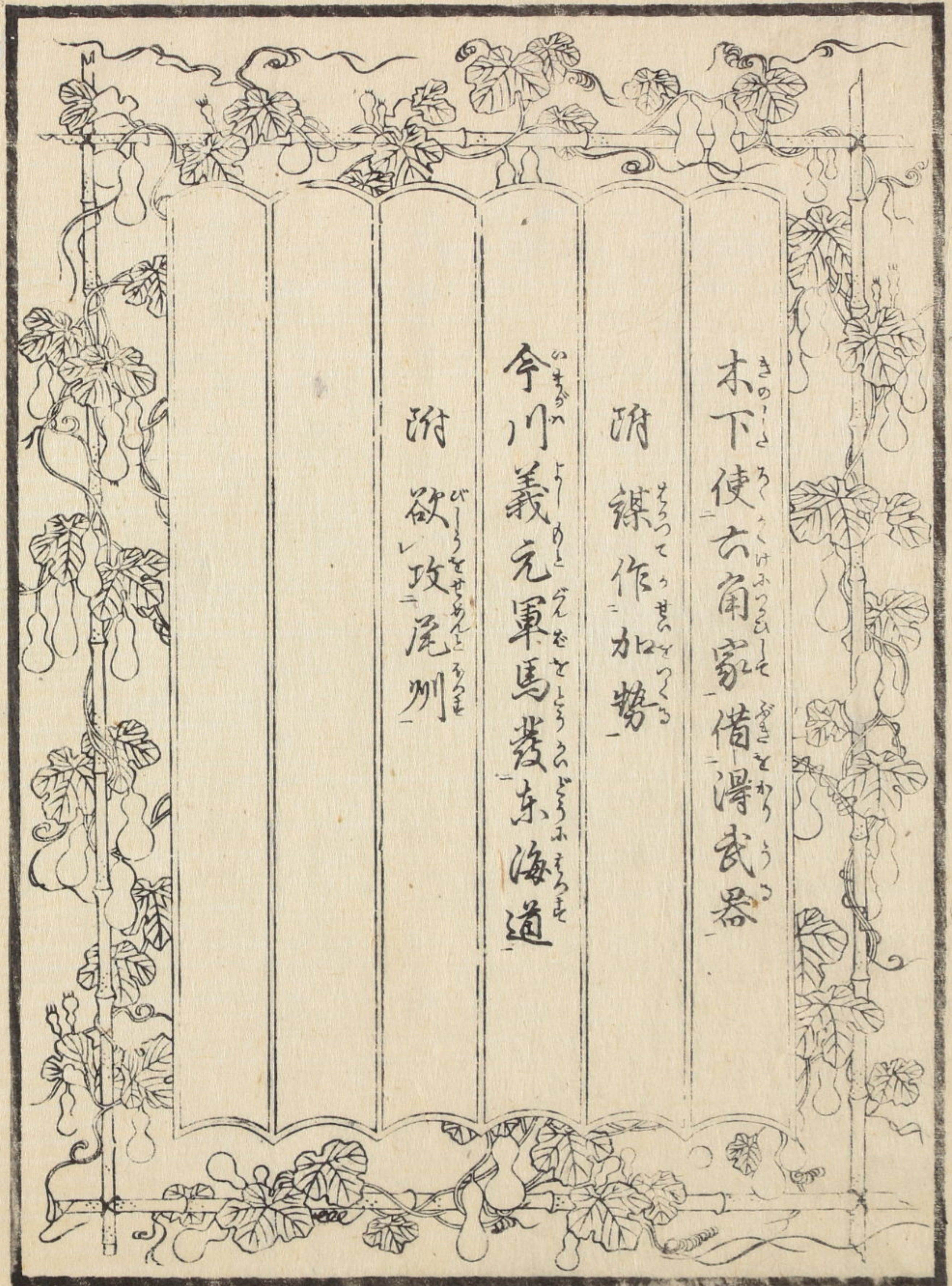
目録

木下使六角家借得武器

附 謀作加勢

今川義元軍馬發東海道

附 欲攻尾州



繪本豊臣勲功記初編卷之八

江戸 八功舎 徳水剛補



左馬助次新十郎復讐及属其子被誅

子昏越ふ憑て呉と頼一。子房漢と相て秦と滅を戸部新十郎が
孤獨の身されど。忠孝の心一し。復讐の懐專なればやんう望の
連せらんや。然るを山口左馬助某子九郎次郎。今川義元の招ふ
應へに従者と僅ふ二三十人牽て東海道と馳下り。程々駿府
ふつきなれば。待設する今川義元。明日直ふ對面せん。山口父子ふ
言囑する。朝比奈備中守承听て戸部新十郎ふ謂ゆ。對面の
其の這間ある。脚戸の陰ふ懸置。尚ほもいらんうと力士四五人と
これふ副し。備九郎次郎と大淵廳まで。これと生捉ふ探とす。

カ士十人と玄關の左右の陰に伏せり。當日ふふれ山口父子。斯事とも知らざり。尋常の装束なり。本城に投来り。玄關に當りて。奏者の侍出迎へ。今日主君の命あり。まづ左馬助に對面せられ。然して後ふ九郎次郎。見え来せんとの評説あり。君の評説案内せんと。左馬助と伴あり。静く周應とくも通る。猶奥深く進みゆくと。九郎次郎ハ斯と知られど。何とやら胸うち謀ぎ。心得がく思ひゆく。父ふ恥と目注あり。左馬助も怪しやと。思へば一足踏止しが。這より返まきまもあらねば。氣配りく間毎くと。瞬もせで歩行。對面の廳の隔亮と。用や否や。左の陰より戸部新十郎跳出声ともうけを。無忌とくむ。左馬助も心得て。振脱んとあはれど。大力の戸部小抱止られ。刀と撃ぎ腕も出む。怪しきく大音あり。

孰者なれば左馬助ふ。斯る無礼とあはれを。詞緯と語れと喚ぶ。新十郎ハ嘲笑ひ。汝が罪のちもむきん。聽て君より沙汰あらん。其响評ふ承听也。汝と捕ふる乃郎ハ。戸部新十郎門が嫡子新十郎なり。左馬助這ふ来らば。活捉べしとの評説と奉汝と斯ハ捉得たり。尋常小繩と承と。一喝発して梓胡まを。左馬助もきこゆる勇士。新十郎と異ともせむ。霎時かゝらぬ扱合し。新十郎ハ父の仇あり。増て主君の命あり。倣損ともせむ存せむも。面目あらんと念誥。齊力くあり。撥せり。命惜まを揮く所見。鐵虎銅龍闘ふて。裂谷崩嶺まをがと。斯る處ハ朝比奈備中守顯出。大音声小罵て謂や。呼よ左馬助。逢ひれざる奉止まら。是主君の評説意あり。カとて一争えんより。勇士らハ細められよと

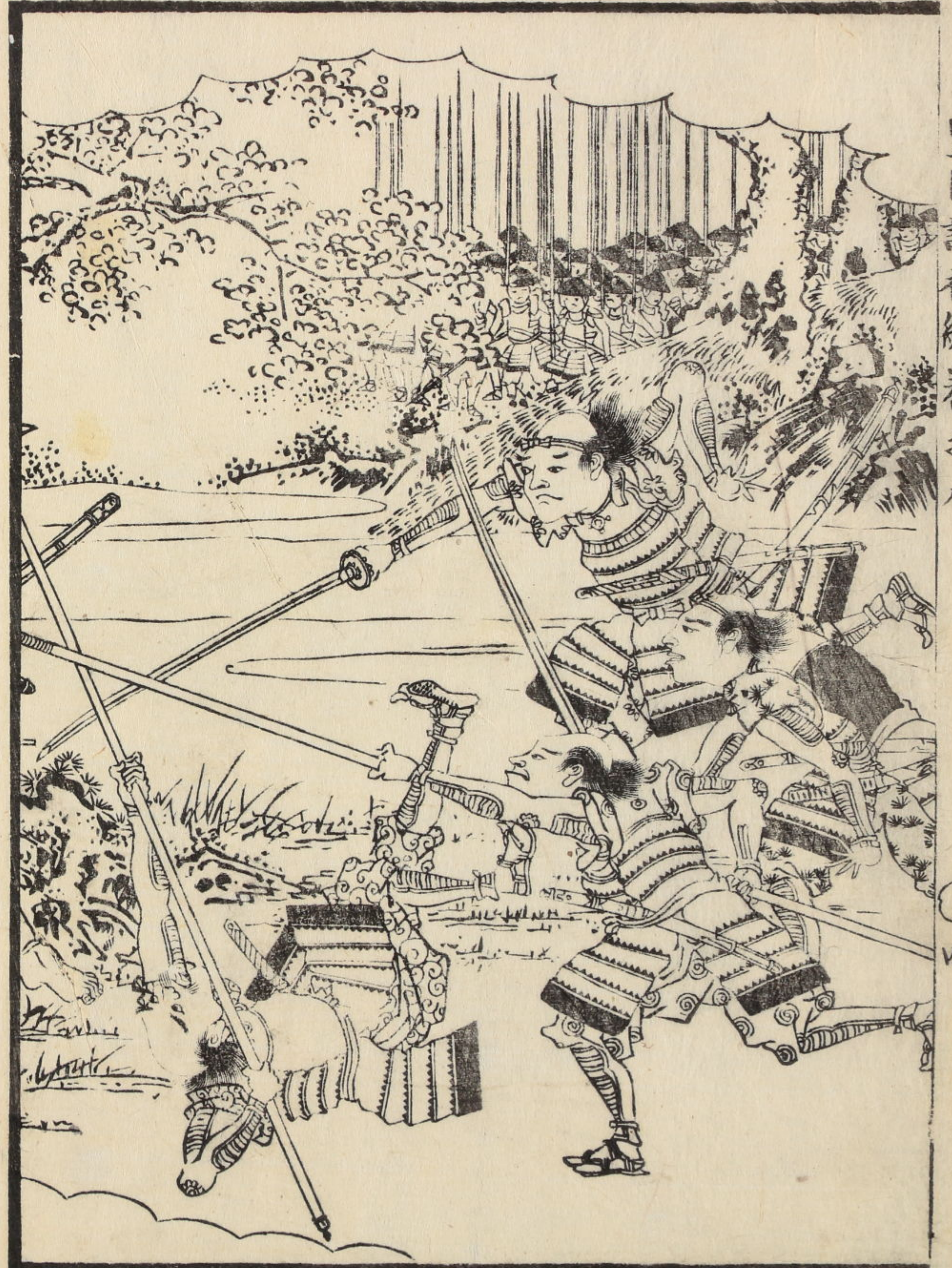
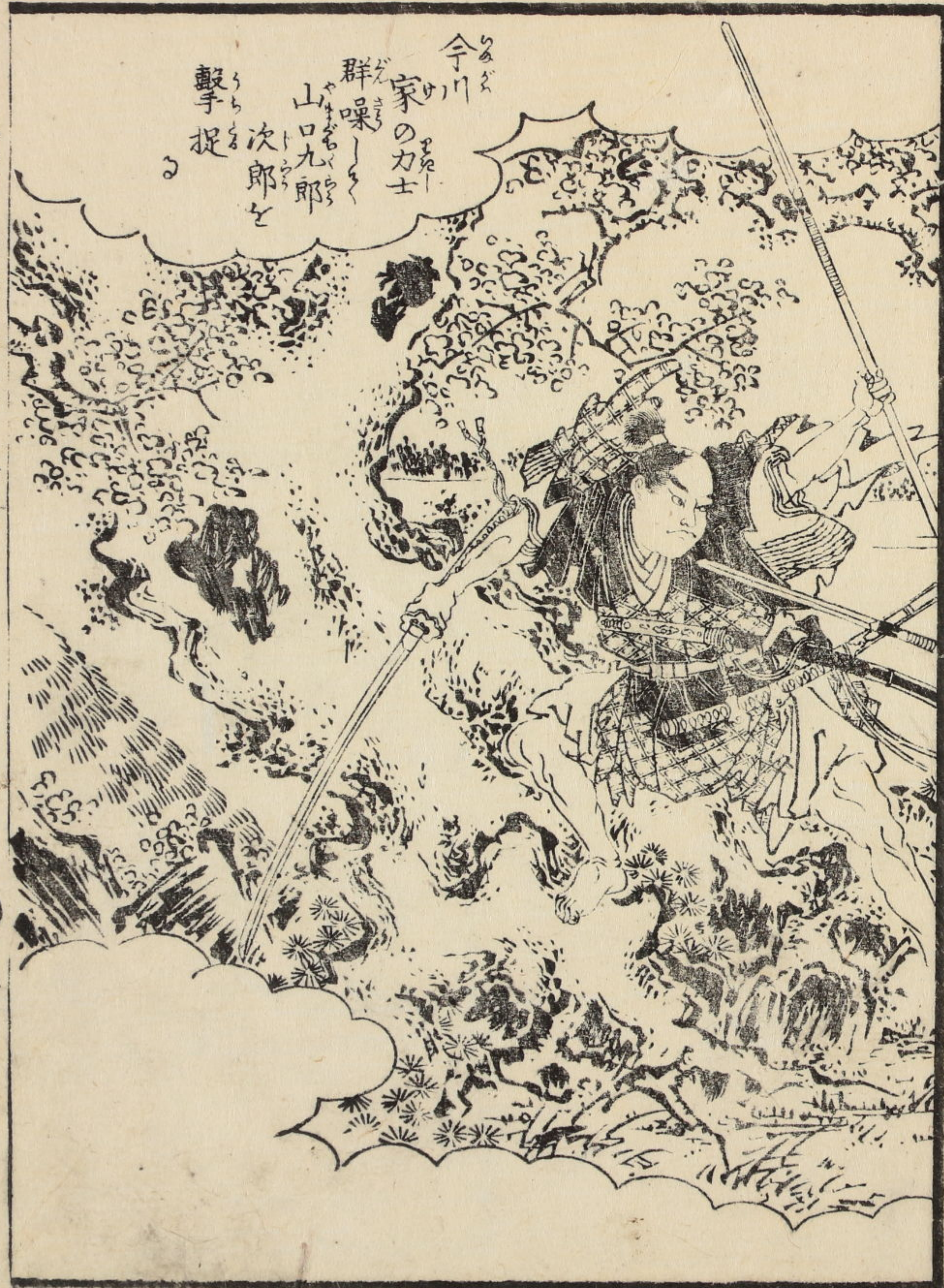


主命と奉て
戸部新十郎
烈勇必志山
口左馬助と
活捉

声うけられて左馬助。猶豫あり。其虚ふ附入新十郎かと烈し。左右より下ふ扱伏て。遂ふ索とを羅うける。左馬助へ眼と瞋じ。我身ふとて新も。過ぐる事と更なる。猶又疑しき條わらへ。一應清訊のて后。如何にも計ひあつたふ。斯る不礼は何事と。我苟且も。尾東鳴海の城主とて。魁將と蒙る左馬助と。匹夫下郎の執扱へ。斯許大領の今川家よ。骨法知らる武士のまや。這保とある上。怖とさき事いふる。主君の前へ快撃せよ。身の究と言解ん。早し掌ね。朝比奈と。鶴とまこと。衆合を。諸腕うけく一隔ある。槽櫃狭の内へ推込る。楮又玄関小控へる。一子九郎次郎へ。父か身の上と案が煩ひ。奥殿の方ふ眼と配り。脱詰て在る。忽ち万韻噪し。叫起る。声音へ平く。父左馬助あり

ければ。厭ハ事こそと。立驕る。後殿と目當て跳入ると。と声うけ左右より。十有余人の力士輩。設意とて呼り。九郎次郎小跳菟る。此士も父小劣らぬ。武勇心得とて。いふまふ。正魁とけ。一人の力士が。腕搔挿で抛擲し。續く力士と二人まで。阡庭と陌庭ふも。僵し。困場小跳出る。斯と見るより。それ遁まら。菟れかれと呼り。多くの力士。頭出。四方の突門と守固。九郎次郎と中。小執田。これ今へ遁も。途も。厭か。人無双の力士輩。十有余人を。と。跳菟て担着と。然ハ真術と見ま。と。太刀技。弱て進倚る。力士二個と四个あせり。某も。懲む。面背左右。声と合せて。担止んと。虚と見徹て。細腰。臑節。捆と着と。飲て。拂ひ。踏踏。抛杖。怒喝と。突て。揮く。やふ。疵と蒙ふ。兵輩。夥し。

豊臣記 初編 卷之八



豊臣記 初編 卷之八

捉得つべきその涯へ見くぬとこ浦左馬助。庵原右近走り出。九郎次郎鄙怯多う。いづも猛威と奮つて。道々道々さのさのらむ。汝が父いふや既小。橋とるに郷へ去り。然るは汝斯く。狼籍と奉止て。父左馬助ケ言譯の妨ともありぬ。とや尋常不衆小伏せよ。設意と重しと思ふにやと。呼らる声小九郎次郎。方僅へ何と云ひらうん。疑令解べき道理ありとて安穩ある身小いらん。然らば咱まづ自殺して。父が冥途の魁せんと。最期と決して怒声と発し。いふ方へ聴か。俺們父子へ尾州より當家のらう。箭と慕ひまわらせ。旗へ小属して。政心なく忠義と竭し。主君の命せよ又存び。織田家小歸伏の体とる。我身ハ清洲小質とありて。夏年月と千辛万苦。當家上洛の道と前んと。

日夜ふ心と碎き。いと。讒者の實否も同究のぞ。俺們父子と罪あるま。當家滅亡の緒端あり。是を正く尾州の謀士が謀果せてけ珍事と引出せ。と覺り。其謀計小陥り。君の心の浅く。吾儕も運も當家の栄も。共小まろく成果あり。見し勇士の一言ハ證あるぞといふ采小持。さる太刀と把整。肚小擲。立正一文字小搔斬て。突起する采灰がりけ。朝比奈三浦を敵として。大張健氣小果。うと。褒ぬめをそありけれ。此事を義元へ言状せ。く。听し。り。され。下辞あり。九郎次郎自害せ。上ハ左馬助が罪詮義小暨。快く誅と加之。と命と朝比奈承听。左馬助と囚車。阿部河原小輓出。戸部新十郎とゆ。山口が首と歐せ。山口滅び。鳴海城小。主ありて。稱小

才とて。周部五郎兵衛長教美濃守常慶の男と遣し。此とき
 織田中への諸老尾木下頼小今川と所合戦これら。主君
 信長も勸めまらせ。山口父子遠くぬら。義元これを滅さんふ。
 然らば今川と戦ふべきと。軍令の如く誓ひされ。諸老もこれを
 猜思。如何やあらんと待程ふ。此度義元是見よ。山口父子
 が首級とめて。笠寺田の大道へ獄門ふくはされ。これを見聞さ
 ぐる。諸士愕然とて。うち敬馬き。實ふ木下凡人ならんと。舌と
 振る感佩あり。己来如く一輩も。半ハ木下伏し。然とも
 柴田佐久間の両士ハ左右偏執の念解む。藤吉郎と悪むと
 敵より猶十倍せり。浩ろくる程ふ信長ハ山口が滅亡と祈り召れ
 這上ハ心と決し。義元と合戦まき。城中へ沙汰せらる。柴田

権六これを听。佐久間小叫て謂けるや。我君木下が辨舌不迷ひ
 今川家と戦むん事。當家滅亡の端あり。如何やもあて。渠
 と退け。安穩とらん事と思ふ。主水が如き族あり。終る木下が
 心腹不歸を。愁る小我今一計と云支せり。渠奴素より武術智謀
 不達もといへども。文字と見ると最拙。然れば兵書ハよも讀
 ず。因て兵理の奥義と傳へ。平手監物と同舌させ。耻と與へ
 て退けを。西士密ふこれと談し。御前へ出て言状をもるや。一
 文武ハ車の両輪され。どれと缺ても轉らぬ道理。然れば木下
 藤吉郎が學力のみと分明。試すのかが。平手監物と議論を。
 尚木下が缺する。緯のつらもせ。傳授させんと存するあり。珍れ
 主君の御承ふかりて。命せつらられ。と言ふ。信長心属れ。

是又例の如き。悪き奴輩のくそをこらふと。思されしうども。これを許され。織田殿やがて平手と。昭。這詞と命せ。听られて。後次木下と。昭せし。兵書問答と命せらる。藤吉郎も有る。音。清奉より。退出せり。既。不。當日。ふりねれ。織田殿大岡廳。不出。柴田。佐久間。丹羽。池田。備。譜代。の。老。臣。諸。士。の。面。我。も。我。も。と。列。座。せ。り。暫。ら。り。木。下。平。手。各。出。仕。座。と。東。西。小。三。對。了。然。一。木。下。平。手。不。云。了。蒙。昧。無。智。の。小。臣。へ。貴。家。相。傳。の。軍。法。ゆ。て。清。傳。授。あ。り。か。下。け。る。決。承。受。ん。と。言。ま。と。監。物。否。清。傳。授。ま。さ。書。も。な。れ。ど。君。の。清。為。ふ。く。足。さ。る。所。と。技。助。合。の。ま。う。一。足。下。も。武。道。兵。法。丹。練。せ。ら。れ。と。承。听。る。試。ふ。と。れ。と。言。さ。れ。し。と。り。木。下。頭。と。さ。げ。い。く。で。ウ。每。学。の。身。と。り。て。

論。ぎ。る。と。の。あ。る。と。け。ん。や。只。清。傳。受。と。存。せ。り。也。歡。躍。り。て。出。仕。せ。り。と。身。と。謙。退。る。と。監。物。見。て。然。一。言。突。言。せ。ん。开。も。兵。と。用。あ。ら。ふ。食。區。の。軌。則。あ。り。或。ハ。陣。形。隊。部。法。ふ。合。ふ。便。即。利。あ。り。食。さ。れ。ば。其。利。と。失。ふ。ゆ。え。小。兵。書。と。熟。得。せ。ら。れ。陣。列。隊。伍。と。進。退。さ。る。と。軍。師。が。隨。不。自。由。あ。ら。む。徒。不。戰。場。の。魁。と。駭。て。敵。士。と。歐。ハ。匹。夫。の。勇。の。も。然。る。ふ。足。下。兵。書。と。学。を。陣。法。と。知。さ。る。駒。ハ。自。心。の。発。明。と。憑。り。て。軍。と。指。揮。し。む。え。緯。誠。不。危。ハ。と。謂。ひ。也。慎。む。と。至。極。あ。り。と。り。木。下。課。の。玉。一。武。士。悉。く。兵。書。と。讀。も。小。臣。ご。と。さ。ら。材。あ。く。學。み。し。兵。書。と。讀。も。能。わ。れ。ば。只。先。陣。と。駭。す。の。を。歩。卒。の。能。と。尽。し。て。存。む。と。い。ふ。も。騷。兵。ゆ。て。力。量。も。又。あ。ら。ざ。れ。ん。其。功。も。よ。く。成。り。と。れ。が。ら。ふ。兵。法。と。清。傳。授。あ。ら。ふ。軍。不。臨。也。

うらさる緯もや。存る多と平伏ま。柴田佐久間へ心うれく。進むて
 声と暴ふ。何さぬ兵書と讀む。兵道軍議と論む。緯ハ闇夜
 の礫不齊一うらん。某方是まを利口ふせ。老臣諸士の評議の腰より。
 妨るまをこそ奇怪なれ。己後兵書とより學びて。君不忠義と竭さる。
 と叱着ま。藤吉郎。各賢の所教訓。恐入てひあり。老く一ながら往古の
 軍法とめて。今の世の戦場軍所不用ゆるとも。勝利と得るとん。決極
 老かす。丹もいふ人の兵書不むりて。唯規矩とのと論せられ。古人
 の糟粕と謗る族もひあり。孫吳をとりし兵法者ハ百代不易の軍師
 あり。孫子ハ九変の理不通むる者の兵と用るの道と知るといひ。
 吳子胥ハ変不應むると。軍の法と稱へり。陣列隊伍の軌則不
 おひて。兵書の終ふ用ひが。唯是臨機應変不陣法もま。連

べければ。兵書不暗一とひせ。さて強不自由なる緯もらねど。傳授あり
 んと學置て。益あきま。ゆらねれば。習ハ貯んと存む。まうと言ふ
 信長感歎一ま。理ありと思されけれども。柴田佐久間ハ心不怒り。
 平手不恥と目注ふせ。監物もあひ心得。臂と張領ふらせ。足个
 只其変不應ト。機不臨とのと説とら。我慢とや調へん。故逸
 とや謂へん。言語絶論の詞あり。と怒声と詰着ると。柴田佐久
 間詞と革信長不請て謂や。藤吉郎ハ臨機應変と主とて。
 古来の兵書と糟粕なりと。誹謗一用ひ。又監物ハ兵書ふら
 て。陣法とまんと謂べ。二人の論議分明ならむ。假ふ木ト平手と
 将り。軍陣の形と化らせ。兵士不指揮する所と見て。渠儕ハ勝
 負と定めん。是非明くふら。頻ふこれと勸るゆ。休ことを

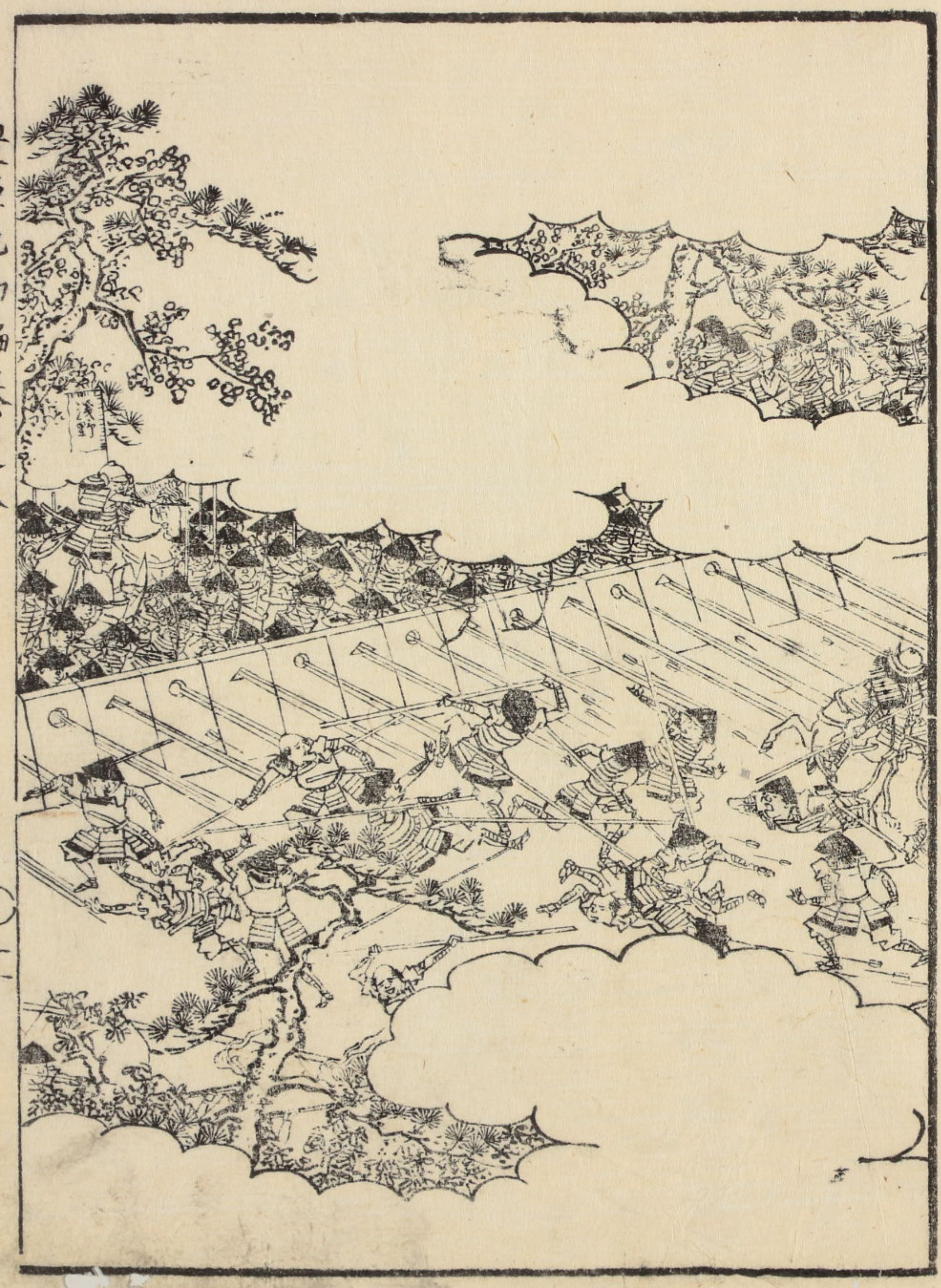
得を織田殿もその準備とせられける。

木下與平手論陣法得賞附諸所築此石

天へ九界の主なり。人へ万物の司とされば。如何せり人より。天小暨たえや。天佐の豊公。これ小敵もする小人カともして。勝へらざる理と知らむ。柴田佐久間愚子も。平手小所擔ひ。亦懲むる小勝負の事と勸ゆる。信長これ小獲ことを得む。外回堞ある岡場小あつて。木下平手の兩人小各五百の騎卒と與へ渠依と左右小別とせりて。假小軍の演習と做しむ。雙方とも小輕銃あり。二尺八寸の木太刀と持し。炮の銃争く矢へ鏃あく。嚴ゆるてぞ立對り。時小監物藤吉郎と標き。足下陣法と知らし。試小一画と布て見よ。可否足下こそ軍師より。一隊と作らんと。謂とも待て。平手監物軍扇揚

て高声小。漢晋の法ハ暫く閑き。吾朝小用ひし。陣列の法と見あ。とりの采左右と掲げ。五百の兵卒ひんがらふ。一匝とせりと見之るが。忽地隊伍と連列整くととと勒り。誠小進退周旋調ひ。宛も堅固のさま小見せらる。然し平手陣面小馬と騎放し。木下刀輪ハこの陣の名と。知らるや。と叫ぶと。頭小振知らむと。唇小監物嘲笑て曰。是ぞ楠正成が用ひし。菊水の陣態なり。兵書と学ぶの敵去。先け法と知らる。稱とす。まど正成の用ひし。小稱変化せり。あなれども。時機小周ての差畧なり。這法さも知らむと。馳卒の進退せらるるや。さ。破の法ハいふ。破らるるを破て見よ。破る事の難く。随分堅固小防がれよ。と謂つ後と。斯見て。大次。浅野と標き。兩士各百騎と牽ひ。翼と張て進む。我三百騎と從

秀吉正流の陣法を將ろ平手監物と亂惱せしむ



て正上面より戦えん。戦ひ央るらん。駒。而士を右より鎗と扱れよと
令と傳へ持する。采幣進りと烈く振るると。正面隊の一百餘人
鳥銃も菟進寄。烟の下より亞隊の百騎。矢節間作て散く。小
射出矢。夫小射疎まされ。まこ。猶豫の怒小見ゆると。この隊の二百
餘騎。鎗夫をへて擲菟る。荐ひ一二の兩隊一駿小。矢烟共小放ら
つ。二隊の軍兵入替く。面も振らる。揉看す。時合はよりと左より。
大澤主水が一百人。右より浅野弥兵衛。息とも吹かて攻起る小。
平手ヶ四隊の駿卒ども。砍起られて門く破れ。右走左奔小散乱
を。木下急小駿卒と退收。上阿音作て勤へる。織田殿仔細小
覽あせり。藤吉郎が軍の進退。神変不思議の指揮ありと。扇と
開て廢す。監物へ大面目と失ひ。朽憾く思へ。詮あければ。

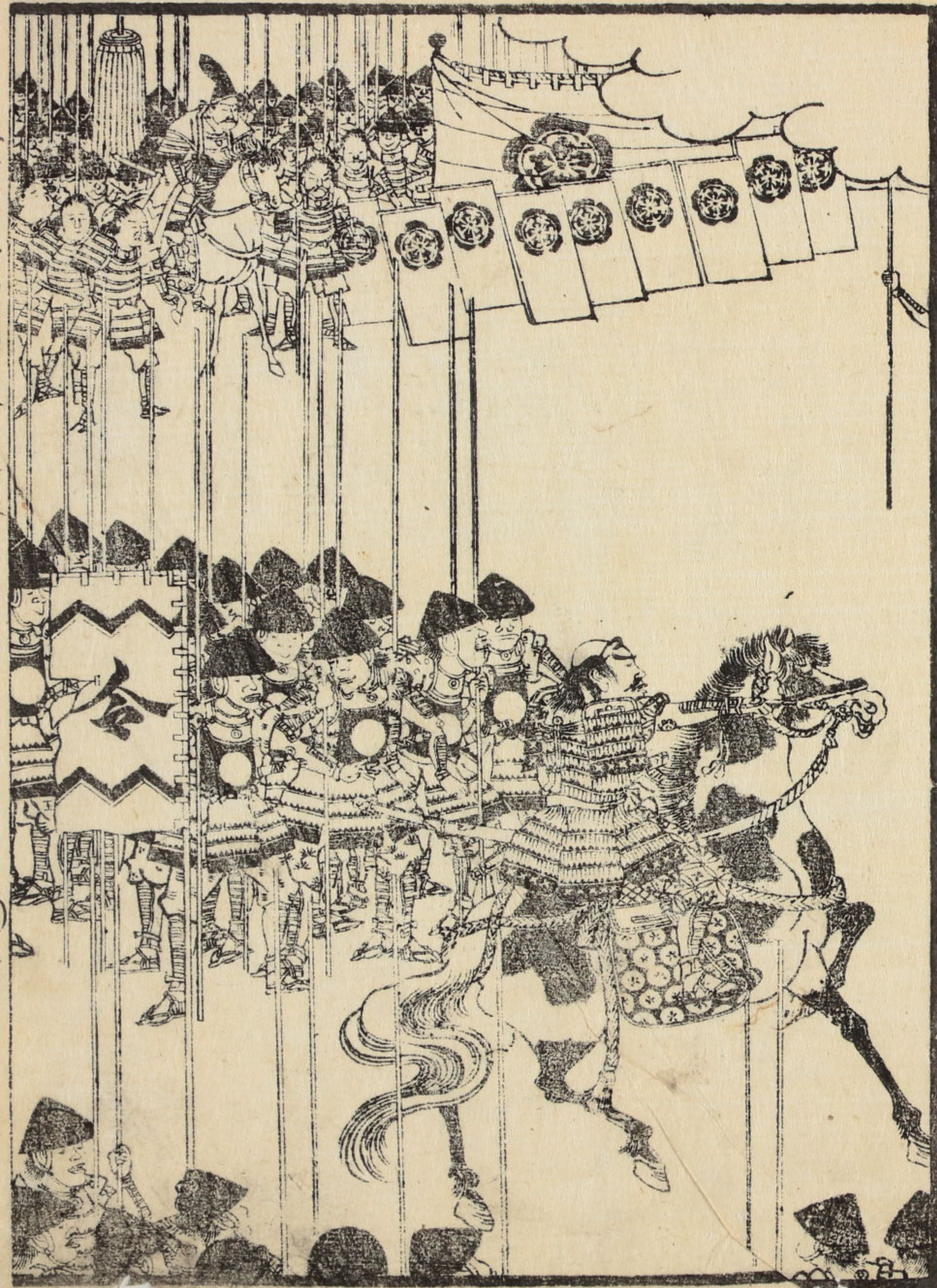
荐ひ陣前小頭。木下刀祿の進退周旋。實小大張ある。奉止り。
這上へ足下中も。一陣布て見せり。不肖なれども攻りあさん。つらら得
らうと。藤吉郎。五百の兵と二隊小ひき別。魁隊の兵七二百人。二陣
の兵の二百人と二隊小くけて。正中と道とを。考して後陣の駿卒よ。
符鉄つらる。柄楯と持せ。下知して藤吉郎。陣頭小馬と騎上。
平手とさて呼る。開も。この陣と知れり。あや。と同と監物。見を評と。
前後と三隊小分する。更小奇正の差別も見を代。門戸もあさん。
定めて是。無名自由の陣らんと。りよと木下。然小あせり。是も。菊水
の陣形あり。時代小固て変化もの。平手刀祿小破らる。や。
斯計。塗き隊伍と。破る小難き。つら。先駈散く。見せり。と。
五百の駿卒と。隊小繋め。監物正魁小進ず。藤吉郎。これと見て。

呼珍らも平手刀称自身小魁と駈あつ。然あら我も正魁小進
も足↑と迎へて戦ふ。両將的面の軍をね一足も退るると
謂ふ監物心小憤怒し返答もも面悪しと言ふも謂ふで突
蒐る木下霎時遮うが。左右へ凱とら用き正中とけけ通
う。平手は是ふ氣と裂す。厥へ勝るぞ軍兵輩。這ふとら
さむ揃起よ進めくと叫ぶ喚う。敵陣ふく進ず。木下敵と
あひひ伏ふひきよせけるが。時分はと暗号の采幣振りごとを
あれ後陣小備へ二百人符鏃しう。楯突並べ。殺窓より打
放も弓鳥銃。暴風疾雨の如くう。平手が勢の五百人。駈破
らんと前小進め。楯と一面小突並べ。牆遠垣のめくふま。打
とも揃も更小破れも責あぐんや前隊後隊。交易らんと共

めく所へ左右小開へ二百人。後と襲を責着う。監物敵と前後
小受進退らふ究て。塵ふあらんぞ所有あり。木下鎮と馳卒と
ひき揚原の場小勒う。柴田と敵老臣諸士。會一同小相果
口と吠てぞ甘心せり。信長大小悦びむ。藤吉郎が方陣の軍配
實小凡人あらまうけり。賞せむんばあまを。千貫の地を
加増しむ。冢宰同列の職とらむ。茲小平手監物へ。只一廟と
俵り。藤吉郎が隊列進退の自由奇正の伍構天然と法小
稱ひ。律の感むる小猶餘りらむ。おのれと嫉妬の念もくけ。
木下が部下とあり。信義と竭して仕へぬと。信長小願ひむ。わ
君も神妙小かりあり。所賞美らりてこれと許され。然して藤吉
郎と近く。昭這遣平手と對論せ。陣法兵則らる隙小斯

豊田記 卷之八

一



木下藤吉郎
 正流の陣法を
 演ずる平手
 監物
 困る
 退陣
 之圖

精しく。演習せと訊く。藤吉郎洋膜て言状せり。小居初き頃より。偏小兵法と掛念。十四歳より遠州なる。松下家奉公して。毎夜軍講兵語と聞。心中これと熟練せり。別演習もつらう。剛文所覽ふ備へる。菊水の陣と言せし。真假二心の差別あり。と監物傳へし。楠正成これとあり。足利直義ふ傳へしあり。正成預て直義か。反心しるを察観せし。其正法と教へし。徒形容と授けし。果して直義謀殺せし。新田義貞ふ宣言と賜り。直義と伐しむる時。正成義貞ふりあり。直義斯くの陣と布ば。如くふし破られし。教小違を箱根の軍ふ。十六騎とりて彼陣と破て直義と追伐せり。且小居が布する陣も楠正成の遺

法より。菊水の陣とりをせし。是は直義ふ傳へし。法と異なり。正成一期秘しければ。尋常の兵學者の存する所ふあり。誠ふ進退自由にて。百戦百勝の法あり。然るが正成の陣は。時代いのみ。世上ふ鳥銃多。鎗もあれど。最短う。然るわば攻も又守も。今と小同大異なり。近代の武士は鳥銃と專一みく行あり。賸槍の三間柄あり。其や攻も又守も増減あり。陣法さる。圖をたられし。實の軍の如くも。只時ふ應へ。斐ふ隨ひ。兵士の指揮こそ肝要なり。言状しけるふ織田殿始の諸老臣も感佩あり。尾張の國の大軍師は木下あり。賞美せり。然るが永禄三年の春も。過夏ふありければ。織田家の諸士達。今川が上洛の事と所せり。數度評定の

ありんか。清洲の諸士今ハ大半。藤吉郎ガ詞ト信ト。防戦の
 事ハ決マシ。織田殿存ビ諸老臣諸士ト召集。今月上洛
 既近ヅケ。運ト天小信モ時ハ何の恐ク所ウハらん。唯速ニ
 戦ム。信上ハ餘の評議小登ル。軍の隊賊ト定ム。命ラ
 命ラ。小諸士一同有無の答ト。木下藤吉郎進出
 君の清神慮ヲ既小。清合戦ト決ス。上ハ老臣諸士の賢小
 も。軍の論談ある。吾も應とも返答ある。猶車勢の
 多少ト。試合ム。覚ス。厭中下小勢ト。仰マシ。隣國
 小加勢ト。受。諸士の援ト。信長听リ。是こそ及。謀議
 され。四方會是敵ト。つれの國ハ。援ト請ト。命ハ待
 心。藤吉郎。從今ウ。敵國小。あれ。信

義ト。つて。通互小。援合こそ。武門の。又他國ハ。援を
 請テ。これト。得も。耻。齊藤。朝倉。北畠。敵ハ。諾
 小。唯。江州の六角ハ。北七州の管領。尚小。使者の義ト。
 許。近江小。到。六角父子小。利害ト。解。加勢ト。牽ヒ。歸
 歸。推テ。小。織田殿も。木下ガ言。小。虚。ハ。半ハ
 是ト。得心。せられ。使者ハ。汝ガ心小。信せん。然ども。汝ガ。江州ハ。往
 跡。今川義元。尚。攻。来。ら。い。せん。厭ト。煩意。思。諸所
 小。砦ト。築。セ。兵士ト。籠。置。待。あ。れ。その。ち。小。江州勢ト
 牽。ヒ。帰。リ。清。心。安。カ。り。め。せ。主。君ト。宥。マ。シ。次。小。諸士。連。ふ。ち。向。ヒ。賢。ト。听。せ。小。使。者。小
 小。誓。シ。近江の援兵ト。牽ヒ。歸。らん。然。各。賢

近江の加勢と。さうして憑とみもいふ事。只是敵への圍へり。
 近江の佐々木織田殿と。一軍ふるつて相待とす。侍る敵も敵ふ
 ようぞ。佐々木といふ名高き弓家。軍態もさぞあつたと。狐疑
 と生むる種とあふべし。疑心の軍の妨り。然るに自軍の一人へ
 他軍の十人ふ當ふべし。無迷の逞兵五千とめて。狐疑の軍勢五
 万ふ對し。歐破らん律最易なり。這遭の軍ふるち勝て。功なるべ
 當家の繁昌。諸士の功名天下ふ惠き。實ふ勇しきこと入りて樂
 志ふらひつむや。と義勇とぞとて勸めしむ。森三太衛門。坂井右近
 池田勝三郎と敵うて。愈一同小義心と固り。斯る上へ命を
 涯に。今川勢と伐敗り。骨の戦場ふ曝まとも。名と万代ふ輝さん
 と。笑と含んで吞しむ。織田殿大に悦びむ。主従が運六天ふり。

命の義ふよりて毛よりも輕し。を大敵とて怖るべけんや。存亡と予と
 階ふせし。と懸せしむ。柴田侮も。今詮多し。此義小同し。然るに合戦の
 準備とせん。評議と決して退出せし。其後信長藤吉郎を
 昭倚せられ。剛才要涯の砦とて。構ふべき地の何所と。訊ふ木
 下謹で。鳴海の山口滅てのち。岡部長教これと守れど。其餘へ愈是
 廢城あり。中ふ就て智多の郡へ地勢南へ張部て。要涯の地も又
 多し。彼邊ふ勝て五六箇所。堅固ふ砦と結構なり。二百五百の
 兵士と揮安。這所彼所より攻出さむ。今川勢の軍威と振え。此
 圖とめて察しむ。と襟底より馬鬣と把出。砦の地格と指し
 けむ。信長大に感悦あり。然るに砦と構んとて地味と仔細小見む
 鳴海城の東南ふ。境川の入海あり。又西南の地と又あり。天白川

扇川あり。潮の進退城下を通む。東へ谷洞漫と連り。北より東へ山積ふして。西へ深田と設けられ。誠ふ無双の地勢あり。城より北七町隔て。西丹下小砦と構へ。其東へ善祥寺。それより南へ中嶋村。或は大川の間に執断。左右一ヶ所小構ふ。此砦。東へ九根西へ鷺津。彼此合せて七ヶ所あり。僉丈と小普請成就し。然して守將と籠る。すづ鷺津九根の兩城に。敵の正魁の蒐り口を。第一肝要の切處を。鷺津小飯尾辺江守定景故備中守の同隈守信宗定景の嫡子多織田玄蕃允信武織田陣止信と大将として。六百餘人と此小凝守らせ。九根の城へ佐之間大學盛重と將ら。同五百の兵と揮ら。中嶋の東一の砦を水野帶刀山口海老之丞二百餘人せこれと守らせ。備又西の砦を梶川五九衛門正繼楠彦の門の二

後尾州大山の城を守。佐之間左京信直右衛門尉信の若者。真木兵十郎伴十左衛門。二百餘人と副従。今川運と待ら。丹下左右の砦を。其期小遣ひて主將と定む。ま少の兵士とも。指揮の如く小これを守らせ。斯く要涯堅固なり。とて。木下藤吉郎秀吉へ六角加勢の使者と。信長小睦を請主従。さう五六人。女とて清洲と起出。近江路にて急がれける。

木下使六角家借得武具 附謀作加勢

砦を破り。鑿と剪小鋼あり。織田家へ木下より。敵國の邪と正と。整正へ。宛も種々の砦を。這遭江州の加勢と請へ。難が中の難き事。あて發足せざる。敵より。徐ざる。倅と議る。とのうら



豊臣 記 初編 卷之八



豊臣 記 初編 卷之八

十八

預て心不謀り定り事はりとて。まづ海東郡蜂須賀村に到り小六
 正勝不音信なり。正勝木下と見ゆるよりも。屢々倒し出迎直小六
 室小請ト容。切小舊日の情とのべ。あつと木下言まを。足下と預
 ての契約を。立身あつらん方と憑む。舊き詞のうらやんト言ひ
 こそ一事實り。諾受しつら。こゝろなき幸あり。許さるべきやと問と正勝
 こゝ革まりぬる課る。いまい足下小我子の瘁をも。憑入べき交
 るると。縦令のうらある事をもあれ。諾さるべき道やある。心隔あく
 語られ。といふ木下。安途。然バ語らん別事なり。這遭
 今川上洛あつき。近江の佐木へ加勢と請ひ。されども承禎信義
 あければ。援兵勿く思ひもよらぬ。然まれば佐木の木武器のといふ
 事もあつて借承来り。是は祈擔し。もんや。といふ小六微笑す。

斯いおのろき事ふと。厥條を。此方より。晞てもなき幸甚ぞ。我
 館の壯士と集り。千五百人もあり。足下佐木の使者と遂歸
 ら。まゝあつ集會せん。所は江州越智川より。小六歸りと待受
 のみ。心易ぞ思われ。諾受の詞。小秀士も。涯々。打喜び。然バ
 這も別まのせん。必とも。中と詞をつぐ。袖と別ちて急ぐ。や。小六早
 く伊勢路と。坂過。二日路と。経て近江ある。蒲生郡觀音寺山の
 城小番。尾張の織田より。遙くと。泰向せ。由と奏者小就て。承禎
 入道小言容。茲小宇多源氏の嫡流。六角左京大夫義賢入道
 拔開齋承禎。江南の地。小冠。一か。佐木四郎左衛門尉泰綱。京都
 承禎。隱居して。家督へ右衛門督義朝。小譲る。然とも。いふ。十五
 歳の幼主。あれば。入道万事と。うらと。時小尾州織田家の

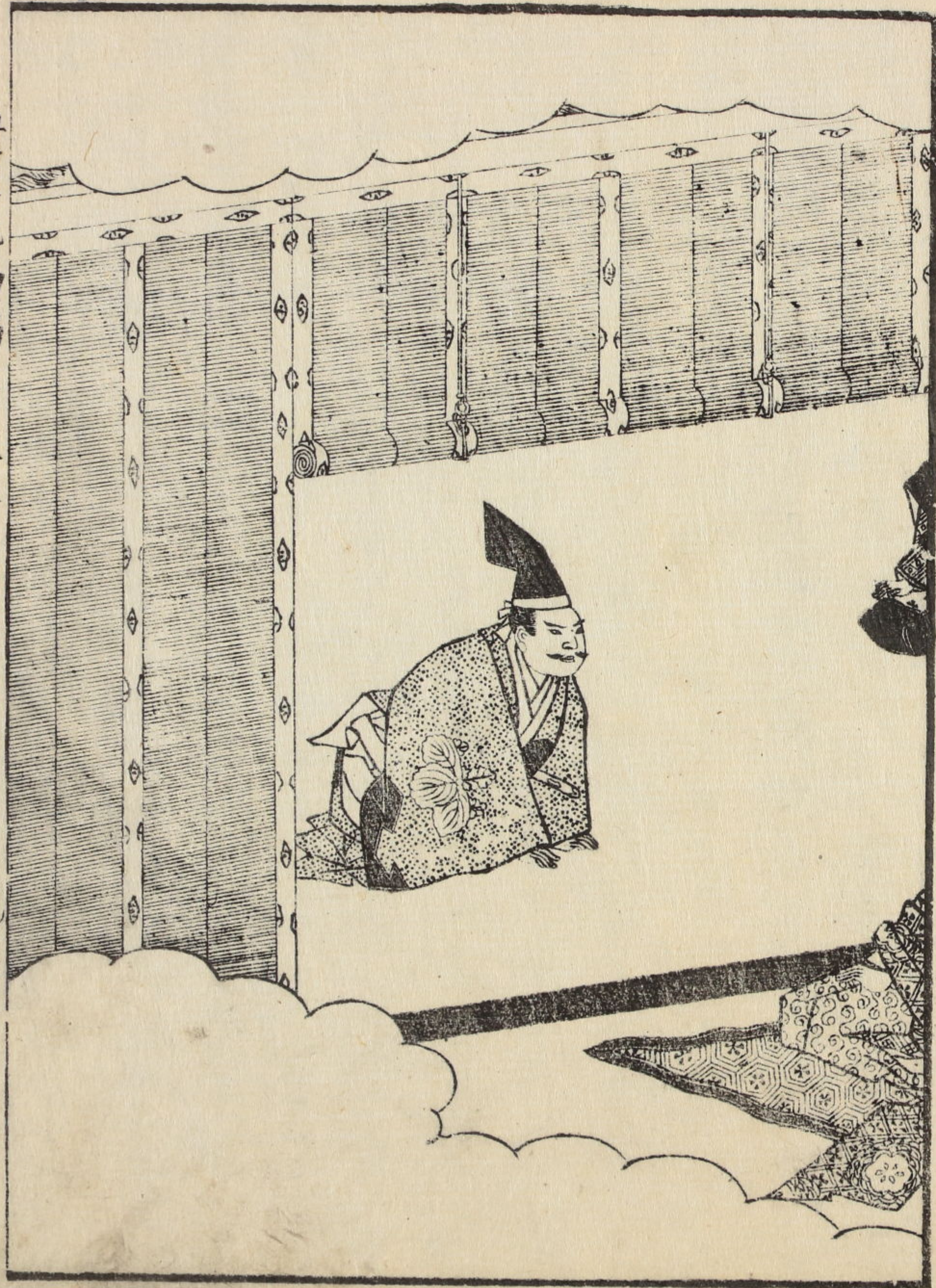
使者木下藤吉郎来り。奏者これと連しければ。六角の家宰
 吉田出雲守重賢承次り。承禎入道ふ斯と告り。入道頼み眉
 と擧め。尾張の織田上總介へ。文書さふも交へし。何事
 られ。遙けき道と。使者さうも治いぶら。何事もせし呼
 容べしと。出雲守ふ命じり。吉田重賢木下藤吉郎と。使者の
 席へ請ト容。初對面の威義あつて。出雲守のあまを。從來
 織田殿との通書の緯さふもさふも。不時の清使こそ不審
 あれ。来意いふと訊ふ木下。いふも課せの如く唯今や。
 音信のあせし緯さふもさふも。不時の参向さるし清不審。實ふ
 めつもの緯さふ。然るも信長の先祖新三将資盛。
 近江越前の國司とありし時。武殿の清先祖源三位秀義

公ハ近江の押領使とありし。遠く親しく在りし。緯ハ謂へ
 も知らしめし條ふ。資盛西海に亡て後其子權太夫親真。
 當國津田の庄と生長し。ねね是れ同邦の親好ひ。さうは
 いふのと。當屋形と信長と清好ありしものさされ。然るも此遭主人
 信長危急の事のゆゑ。武殿の扶助と請んぐ。使者と参らせ
 たり。清披露ひし預めといふ。出雲守承次り。承禎ふ斯と
 言状を。入道つゞこれと。所いさる使者の口状態。最賢くぞ听え
 たり。先對面し。縁ひと訊ん。快呼入れとありし。程ふ。出雲守
 把て返し。藤吉郎と案内し。本丸に投来れ。右海門督義弼。援
 齋承禎座と同し。對面を。响み承禎問ていふ。尾江の道の遠
 さと厭ふ。願ひつゞ登り。由出雲守より傳聞せ。織田より願ひ

斯波義連の
今川義元
の戦い

のちもむきへいゝる事あり申て見し。言は木下衣慈と怒し。辨舌
爽ふ古く謂やう。這遭主人信長より。願の條ハ別事小に織田
の主人より斯波家の大敵。今川義元大軍と將ひ。上洛とくころ。
路次の國々追捕し。推行ら小尾川の地ハ。其通路ありぬと。
信長迎へて合戦あり。先年引馬野の戦ふ。今川のころ敗軍
せし。斯波義連の耻とも雪ぎ。うつら尾川の百姓が塗炭の苦
とも救なき。存し起とも兵士少く不足し。意本あくし。
當所屋形へ願ひしありせ。清経と津借つらう。清経
とふより一奉る。其旗の威の下風小周て國中の兵士儼氣力
と増し。軍の勇と添んが。使者とあらせり。屋形の駿
四目結ハ。天下小藏多し。其花号とふ見まる。あま。縦今

今川百万の大軍とて攻来るとも。何とく思ひ。縛ららん。願ふ清許
諾とされし。言演れ承禎入道今川の軍勢のうらむ。織田
の兵士幾許ありや。然ハ義元が四箇の國人ハ。あま五万もけり。
然して織田の武兵ハ五千餘あり。然ハ近江の援兵と。
五千二千借されし。勝利と得るとおぼし。吾命ともおぼし。
さぞ軍ハ勢の多少ふらぬと。知し。わを縛ふ。言新。あま演ふ
つらね。大将の指揮の順阻ふ。何十万の敵あり。兵士心を
一致せ。破崩さ。絆難く。然る小此般主人より。睨ひし。わを
加勢の義。尚清兼諾なき。則ハ唇亡びて。齒牙寒し。わの金言え。
よく清遠慮あらし。怖れも。説並ふ。兼禎猶も。説を。
使者の口状理され。我國近來江北の浅井一家と闘合。
長政妻を



武器
借得
圖

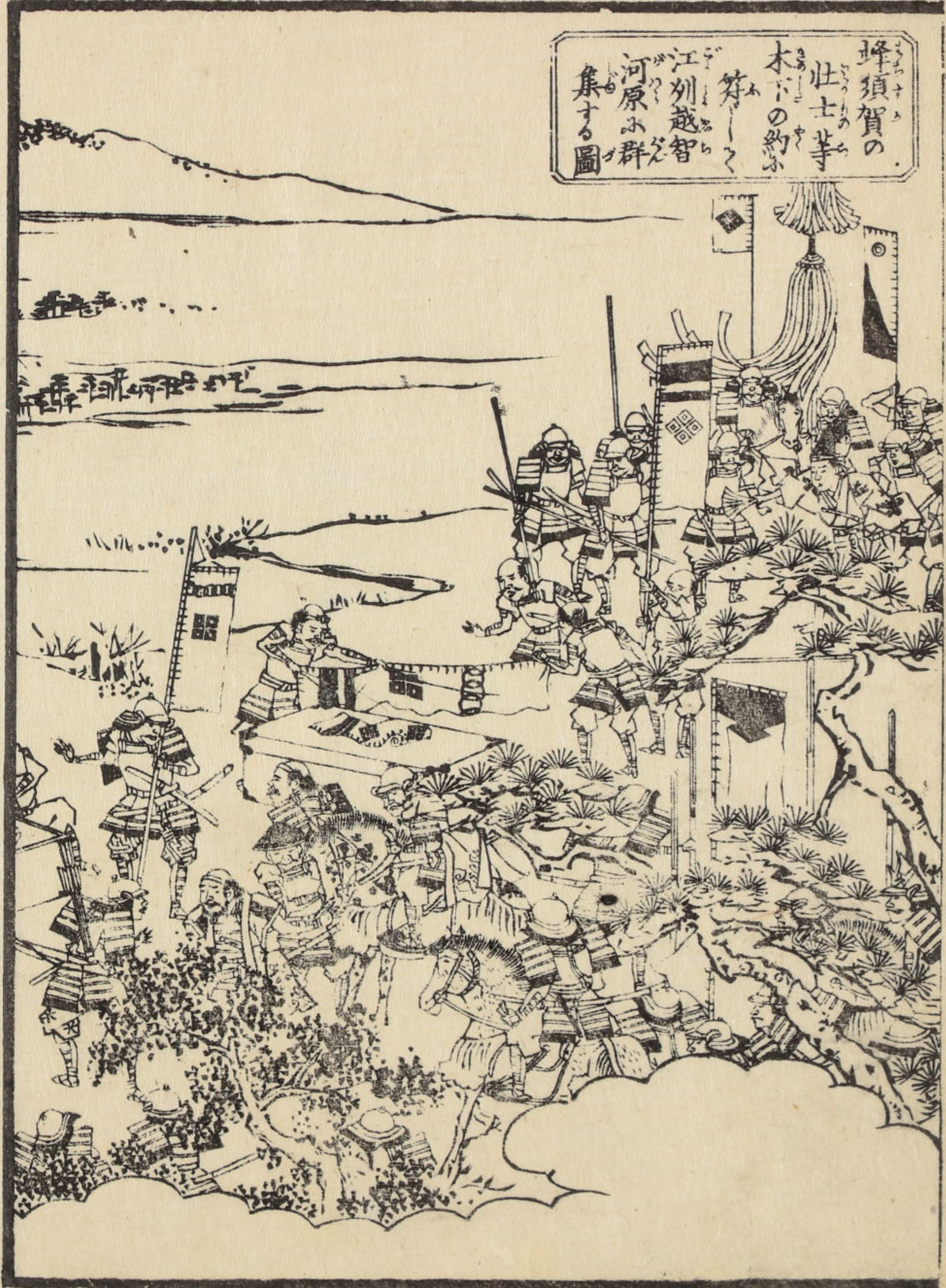
秀吉
不思議
六角家
使節

あつた。とりよと秀吉が「吸」。それい先も言を如く。沖加勢の兵士
と遣はさるふへ及むべし。只千餘人の旗當慄。甲冑との借させ
む。其あてこと足りまゝ。と。只管願ふふ當主義。獨羊を思
おもせども。了得い大領の主されば。秀吉が智舌小感下。速ふ是と話
むい。土雲守ふ命ありて。一千五百の武具へ勿論。旗當慄を借賦。
頼ふ木下と賞美り。最懇切ふ饗應せられ。藤吉郎と歸され
らる。秀吉大歡ひ勇を。一千五百の甲冑兵共と。あ申き。權ふ執收り。
こ四十人の人技とやとひ。昇擔せて多ふ隙も。同國越智川ふ
来みけら。預て峰須賀正勝ふ約せ。詞のりらとめて。小六の木下が
歸るき。時日と量て準備ら。家ふ養ふ壯子輩と。美濃伊勢

近江小旗御せ。千五百人の猛卒と。這隅彼隈ふ集らせ。木下
逢と待ととく。藤吉郎へ使節と做果せ。根と人吏ふ昇荷をせ。
道急ぐせ来みければ。正勝あて出迎ふ。秀吉涯多くそれを歡び
荷を来り。甲冑兵共と。愈某へ配らる。一千五百有餘人と
越智河原ふ隊伍ら。若然とて所ねとさ。りりの世人の
よく知る。六角佐と木の花号。四目結のよせらるね。誰ら近江
の六角の援の兵と懐をさるべき。厭上良ふ集る壯士へ大言。江州の
産るね。實の六角勢も。如何で是ふまゝと云と。藤吉郎
瘧子笑る。小六と招ひて其勞を酬ひ。隊伍とて決定むね。
正勝も借小歡勇と。且驕氣小謂ける。それ六角の加勢あり
こも。多くハ輕卒の品輩と。名と威と耻と知るべき。武士へ左右の



豊臣氏



蜂須賀の
 壮士等
 木下の約
 符
 江列越智
 河原小群
 集する圖

豊臣氏

二十

指と屈むるゝも。凡有まゝと懐く。今も集りし壯士輩へ
 のれも傑氣の暴武士も。無臆死の族を。一人とゆゑ
 六角の加勢小比を。五六人も當りし。中も殊小勝と。ら
 稲田大炊助。青山新七。同苗小助。河口久助。日比野六太夫長
 江半之丞。梶田隼人。松原内匠助。あんとりて。各名を得し
 勇士あるが。假し六角家の士名を呼せん。這よりらむと健
 づちて。のみ小水實小のと同じ。尾張とて名をけるが。這小
 伊勢へ敵國あり。訴歩のそで通りあり。狼藉のそも計づく。
 まづ北島小道と借通行まゝと懐ひ。秀吉もさうの
 使者とめて。員辨の郡。梅戸貝野の地頭小遣す。是へ江
 六角家より。兵士一千餘人と牽て。尾州へ當向の所領地

通路の先ふおいて。新温防をまじくひ。異義多く所通しふをれり。
 和義救々く謂容り。那地も無事小路とかし。つづもりらる
 木下峰須賀。尾州の地を投り。然るど地下人輩。六角
 勢の旗さめ。従来見る輝へあけねど。江州佐木の花號。四目
 結とりのそ。種々よく皆知るるわ。實し六角家の加勢とおひ
 浩る大家も織田殿の屏伏せらる。條りて。加勢と送り遣し
 める。駭くもあを訝るもあり。街巷の風説喧し。既し這勢路
 次とのそを。清洲近くありね。敵し六角加勢の事と。あつら
 りと謗まる輩も。忽木下が智辨と感し。且織田殿の遠威
 尊と。這遭の軍と。烈まぎん。他家へ對して面目ありと。自己と心
 勇励す。妨戦し身とゆゑのけ。藤吉郎の清洲へ歸着し。



秀吉の妙智
江州不使と
得がた
六角の
加勢を
求め
帰る

豊臣評伝巻之八

江州勢を區くみ。假館と擇て分與へ自身に直地ふ登城し。主君信長小見を承禎父子の動靜と詞詳ふ言状して。次兵器甲冑の事と借受し。初より蜂須賀小六が加勢の末。正勝が智勇の俸まで。語つて果す。君の技助する者ふこそ。頻ふこれと勧めし。且今日と戦ふ。老臣諸士の存懐おね主張近江の加勢とおぼされ。然るべしと稟まふ。織田殿殆感ふせられ。藤吉郎が詞の如く諸老臣へ指他せられ。今川義元進来らば國境まで打て突。頻小勝負と決せん。其準備とせられ。今川義元軍馬奔東海道。属欲攻尾州。

永禄三年五月六日 辛未夏至の節小入れ。午火生じて。卯木死す。五行の運る。然る小義元へ己卯ふされ。信長へ甲午ふ生る。

痛む。今川義元。今奉今月軍と発し。信長とて敵とまふ。誠小天然の死地小着る。慎まざるべからば。然るど小駿州府中の大領今川治部大輔義元朝臣。年来の宿懐おね。直地小上洛の事と遂京都の將軍家と補佐し。好松水等が狼藉と。鎮めんと思ひ起る。采地の仕法小睦む。殊に隣國の輩。留守と得ると。境地と推乱さんとの煩勞し。遂に斯まで延置し。此春既小北條家と縁家小あり。武田の素よりのお深く。駿河と窺ふ所謂。今こそ時節到来。先打発と伺し。伊豆駿河遠江之河四ヶ國の軍兵催促。小應して海聚る。駿府の苗守小嫡子氏直。其餘の一族。門家の將士六十餘人と擯らる。然るど五月十日の辰の上刺府中。

の城と発軍す。一日六里餘の式歩とくせせ。四日行と経る十三日小
 遠州濱名小着れり。這みて諸勢と待揃。其勢都合四万有餘
 騎こや。曉ま六五月十日。海上紅旭の光と共小。濱名の郷と打起
 て。東海道を髪かみの如く。白須賀二川吉田驛と。軍兵片地の
 断地あり。得く然と推登り。十九日の末と経るころ。岡崎小投着り。
 軍の分部と決定られ。同月十七日小岡崎と打発。尾張の國智多
 の郡小着。桶狭間の南丘あり。要涯堅固の地と撰られ。十八段
 小陣と居。十八日の蚤朝より。智多の郡の諸所と放火。明日こそ
 兵士と烈す。鷲津九根の兩城と快攻陥して鳴海へ推出。一
 犇地く攻ふきんづめと烈く然るその勢は。千龍淵小跳らん時
 万虎嶽と走るが如く。旌旗へ峯も谷際も隙間もきき翻る。

時刻ときく小金鼓かねつづみと鳴ら。異口同声いこうどうせい小奮発うきはつする。陰陽合呼いんやうがっくの
 喊こゑの声こゑハ。天地山河てんちさんかと震ふるをせと。おそりあんと。言語ごんご小断たぎする相あひ
 をりりける。

繪本豊臣勲功記初編卷之八終

